国語　京都大学　文系学部（前期）１／３

一

問一

長編作品の要約が単なる断片の集合であるのとは異なり、短編は、作者の捉えた具体的なイメージを過不足ない分量で緊密に表現した文章の調子を持つものだから。

（解答欄３行）

問二

短編は、具体的なイメージを鮮やかかつ簡潔な表現で読者に素早く印象づけようとするが、長編は、抽象的な思考に基づく展開を読者にじっくり理解させようとする。

（解答欄３行）

問三

あるがままの現実をすぐさま表現する「写生」とは異なり、実在であれ心象であれ作者が捉えたイメージが、いったん記憶されて蘇り鮮やかな広がりをもつ文章になるには、それが醸成するまでの十分な時間が必要だから。

（解答欄４行）

問四

『めんどり』は、登場人物の会話によって各人物像や人間関係が明示されており、小品を集めた『にんじん』を読む際の導入にふさわしいだけでなく、会話による描写を得意とするルナールのスタイルをも印象づけるから。

（解答欄４行）

問五

作者が捉えた現実世界や心象の生き生きしたイメージを、じっくり時間をかけて反芻し回想することで豊かな内実をもつものへと高め、それを読者に素早く印象づけるためにも、直接的な会話などのように、作品固有の調子にふさわしい簡潔で凝縮した表現により生み出される。

（解答欄５行）

©河合塾　2015年

二

問一

人の生死という厳粛な出来事に全く心を動かされないわけではないが、長生きして死生の経験に馴れてゆくうちに、それらに関する感情が摩滅した結果、世間的な人情の発露を超え出てしまっても責められまいということ。

（解答欄４行）

問二

親しい者たちの多くが自分をおいて亡くなっていくことに気が滅入るのは当然だが、生きている以上死は誰しもに訪れる宿命として受け入れざるをえないということ。

（解答欄３行）

問三

死との際会が稀な思春期には、親しい者の死を我が事として絶望のうちに受けとめるものであるが、老境に入ると、度重なる死別の痛みを心身に刻み込んでいては生きていくことができないと思わざるをえないということ。

（解答欄４行）

問四

親しかった友人達の死に際して、故人の具体的な生から切り離された形式張った側面は削ぎ落とされ、滑稽さすら感じさせる愉快な思い出ばかりが浮かんでくるから。

（解答欄３行）

問五

若い頃には、死は厳粛な出来事であり、死別に際して愉快な場面を思い出したりするのは冒瀆だと自らを責めただろうが、いつしかこれは生を蝕む死の悲しみや苦痛を和らげるやむをえぬ反応であると思い至り、その自然な移りゆきの中で死を心静かに受けとめるようになった。

（解答欄５行）

©河合塾　2015年

三

問一

（１）

右大臣をのぞいて、妻のいない人で再婚相手として悪くない身分の人はどこにいようか、いや、いるはずがない、

（解答欄２行）

（２）

女君は月並みの男と思いなさって、私が独り身でいるので言い寄りなさるのだろうか

（解答欄２行）

（３）

右大臣は、いっそう今は亡き妻のことばかりが自然と思い出されて、たまに女君のもとへ通いなさるにつけて、心からうち解けたこともないままでいるけれども

（解答欄３行）

問二

私だけが夫に先立たれて寂しい暮らしをしていると思っていたが、あなたも妻を亡くして同じ境遇だと聞いて、どうせ再婚相手を探しているなら私の家に通ってきてほしいと、女君が右大臣に求愛している。

（解答欄４行）

問三

高貴な女君が、趣深い言葉をつくして熱心に求愛し、「恥をかかせるな」と言っているのに、それを無視して通わないままなのは、風情を解さない情け知らずな態度でもあり、女君に恥をかかせることにもなると思ったので。

（解答欄４行）

©河合塾　2015年